

佛
偈

猿
故
人
五
百
題

上

5
1181
1

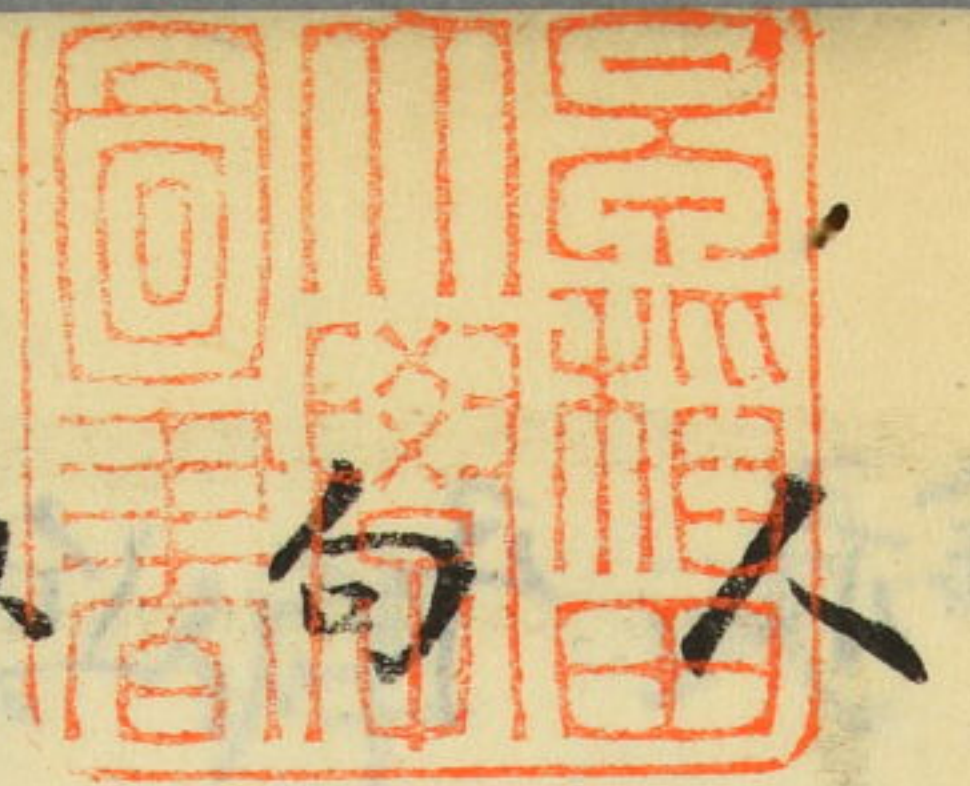


一具庵宗匠撰

俳諧 續故人五百題

書肆 青雲堂梓

門 411
號 1181
卷 1-2



人 心不同、猶如其面、作俳
句 者亦復自甫、狃我所好、
以 譏彼、彼亦狃其所好、以
笑我、至仇讐相視者、非惑
之甚、守、予晚年慕蕙翁、遊
于松窓之門、雖未能入其

室、螢雪工夫殆費十數年、
暇日涉獵諸抄、捃摭以為
一冊子、聊以付尚友之義、
近日書肆某乞梓以行也、
予謂卅集一時隨聞見而
錄之、初無示人之意、取捨

或未盡其公也、雖然、寒鄉
僻地、晚生乏資者、置之於
八上、則江山風月自在其
中、亦不為無聊矣、松窓嘗
曰、古人所好、一異其躰、
裁、苟能蒐羅、則可為大家

也然則此冊雖小、安知非
其楷樣哉

文政己丑春正月

一具庵一具



凡世十方空二書



玉百様のらるるにたゞこのあゝとありしと
まゝふりくゝいそりして大慶高橋と
方すうたゞいゝもめすくたゞ短
句もてあゝふもまゝいゝらたゞり
けりいふもがけりしと昇平鼓腹
の御代のみゝまらゝりかゝる
中にも帳臺のつ花の夕漁村に雪

此あやばれ義母いぬらうい一毎
だもまらていこもぬらんあうりける
高ういあしと風雅の二字よ眼とあて
うらうれ母あまいらうまいこらまいて
むとおもいらまあういましくいりり
一具菴主いりあうりらうぬるお
いりらういぬるいあまらうまきいろ

ちやうし子急つて園う實拾て句
惠襲よらめおまいぬるいあまら
此家事よらうらうもちういあ
まうあふりちよもえして桜木よど
まらあういぬるいあまらういあ
いあまらあまらういあまらういあ
いあまらあまらういあまらういあ
いあまらあまらういあまらういあ

かみ餅	八	若水	八	年玉	九	かりん	九
水	九						

植物之部

子の日	九	小松	九	七種	九	なつみ	十
まじり	十	あし菜	十	芥	十	梅	十
折	十一	ととろ	十一	下崩	十一	若草	十一
核	十二	み締	十二	木のめ	十二	つる緑	十二
藤の絡	十三	莖	十三	らぎ	十三	すみれ	十三
ふんち	十四	はとど	十四	めざみ	十四	木瓜	十四
芦角	十五	接木	十五	ろど	十五	茶ほみ	十五
菜の茎	十六	種ちり	十六	桃	十六	海棠	十六
連翹	十七	梨の花	十七	杏	十七	あや	十七

生類の部

赤蓮花	十九	草むぎ	十九	苗代	十九	ふんち	十九
菘	二十	山吹	二十	はと	二十		
鶯	二十一	ねこの虫	二十一	白魚	二十一	ふの巢	二十一
雀子	二十二	百子鳥	二十二	雉子	二十二	ふんち	二十二
鶯	二十三	乙鳥	二十三	駒鳥	二十三	うき	二十三
麦藁	二十四	蜂	二十四	蜂	二十四	うき	二十四
蛭	二十五	蛙	二十五	田螺	二十五	蟹	二十五
若鮎	二十六	飯鮎	二十六	藤角	二十六		
時候之部	二十七						
佐保姫	二十八	ひんぎ	二十八	ききり	二十八	泳生	二十八
左義長	二十九	霞	二十九	おやう月	二十九	几中	二十九

藪入	三	餘寒	三十一	河かゝる	三十一	燒野	三十一
雪間	三十一	残雪	三十一	東風	三十二	春風	三十二
雪解	三十二	春の雨	三十二	春の雪	三十二	春の月	三十二
春の夜	三十三	春の海	三十四	春の月	三十四	春の月	三十四
春の野	三十四	春の海	三十四	水ぬるむ	三十四	海雲	三十四
海苔	三十五	寒食	三十五	草餅	三十五	陽冬	三十五
系山	三十六	二日酔	三十六	初午	三十六	彼方	三十六
沙忌	三十六	浪盤	三十七	西行忌	三十七	永き日	三十七
出代	三十七	糴	三十八	鶏台	三十八	汐下	三十八
馬刀	三十九	曲水	三十九	畑もち	三十九	長雨	三十九
いろれ箱	三十九	案入	三十九	行春	四十		
通計百五十二題							

古人續五百題 夏之部 夏之部 夏之部 夏之部

ほろき	初	閑古	三	むさ	三	雪のま	三
よ雀	三	翡翠	三	羽ゆけ	三	鴉	四
水鶏	四	あし	四	水鳥の巢	四	あし	五
かき	五	羽蟻	五	あま	六	蟻	六
がら	六	虫	六	蠅	六	夏の虫	六
蚊	七	蚊	七	蚊	七	蝸牛	七
蟬	八	空蟬	八	麻の子	八		
時候之部							

更夜	八	あひせ	九	青蘆	九	葵糸	十
ほつこ	十	卯月	十	早白	十	あき月	十
夏糸	十一	夏書	十一	灌佛	十一	糸淨堂	十一
新茶	十二	糸淨	十二	風呂	十二	みどり夜	十二
麦秋	十三	小角豆	十三	かひを	十三	軒	十三
鱒	十三	のぼり	十三	糍	十四	豆蒲湯	十四
印地うち	十四	競馬	十四	竹酔日	十四	五月雨	十五
入梅	十五	虎々雨	十五	ぬ月闇	十六	夏の日	十六
夏の月	十六	夏野	十六	夏山	十六	火串	十六
蒸らち	十七	田植	十七	早乙女	十七	早苗	十七
ま田	十八	田草糸	十八	あきぎ	十八	らちハ	十八
麻状	十九	帷子	十九	袷園秀	十九	氷室	十九

雲の嶺	十九	夏乞	十九	昼森	二十	土用	二十
虫ぐし	二十	あひさ	二十	夕立	廿一	簞	廿二
牛奴人	廿二	まふみ	廿二	風之鳥	廿三	うち水	廿三
とろてん	廿四	せいの栗瓜	廿四	沖鱈	廿四	清糸	廿四
さし井	廿五	汗ぬぐい	廿五	夏瘦	廿五	川狩	廿五
秋近し	廿五	不二清	廿五	伊枝	廿六		
植りの部							
郊の糸	廿六	糸糸糸	廿六	若楓	廿七	糸糸	廿七
夏はるい	廿七	志ひ	廿七	夏木立	廿七	下闇	廿八
青嵐	廿八	糸盤木糸糸	廿八	桐の糸	廿八	糸糸	廿八
夏柳	廿八	まき梅	廿九	樗	廿九	栗の糸	廿九
合歡の糸	廿九	糸後糸子	廿九	志田の糸	廿九	梅の糸	三十

百日紅	三十一	燕子花	三十二	ほまき	三十三	芍薬	三十四
葵	三十五	花のそと	三十六	けい	三十七	荊	三十八
牡丹	三十九	ゆき	四十	茄子	四十一	あさぎ	四十二
紅牡丹	四十三	夏菜	四十四	櫻子	四十五	百合	四十六
なごみ	四十七	さくら	四十八	藻の花	四十九	檨麻	五十
紫陽花	五十一	萱草	五十二	あやめ	五十三	夕ぐほ	五十四
萍	五十五	河骨	五十六	蓴菜	五十七	蓮	五十八
蓮葉	五十九	おひら	六十	蘭の心	六十一	美菰刈	六十二
若外	六十三	林檎	六十四				

都百五十二題

古今續五百題發句集

春之部

花

あそふらうくさひたてよ花の雨
 うれしくとくを花の芳きま
 花をよほこの山風やとしはくみ
 武蔵野もはらう出てまき花の酒
 目うつりや花よむせくるさし山
 花はうり山と日と海の朝ほけ
 うねとつゆのふりともさる童うね
 花さうりいともみやこの酒玉うれ

負徳
 負室
 季吟
 宗因
 鬼買
 芭蕉
 立圃
 守氏

花さうり子てあうりあうりまぬう子
ち好くよも毛虫よかうり家様
ある人よめじしくと花見えか糸
ううくとまてん花えの苗ち居我
花さいを死ともあいつ病ひう那
ち好く一扱ぬるや葛城うらまら
河まうや西行房りち好くうせ
首知して岡のむんよあうりいと
をふまてあそぶ日あうりてち那うんう角
花ふら川りれて夢よりあふ死んうる
大佛うううふ花のはうりこの糸
標の装束はゆきうり直さや花の中

其角 嵐雪 去来 大草 末山 正式 言水 荷兮 野坡 越人 路通 北枝

昆布物や花よ氣のほくうり花を
酒部や山琴の音せよ窓の花
大掌やうり母の奥は花のそを
山やち好酒根くの酒ちやう
めつじや内うり花見の初めうら
朝えうりの湯を斤勝や庭の花
ちりあひや初花うりの物うりこれ
見まのうらけあけうり花の耐
教うりあうり酒ぬと人うり
疱瘡のあたまうりうりうりうり
葉喰ふうり白ひをさうりうり花おさ
常無ふうりうりうりうり花の鳥

利牛 惟然 曾良 亀洞 杉風 孤屋 野水 荒弾 舟泉 傘下 舟我 午那

あはけさや風車 奏る 差の とくき
さるの山ささくも 舟入て 歩よきん

薄芝
晨風

櫻

鶴の巢や嵐の外はさくらさくら
あはれとあはれと 櫻さきし物とつらひ
櫻ぬきそらうらうらとさるひと
を鞍うひもれやとる 船入山はさくら
かけみしと 障出きれけり 櫻かき
藤寺かくまぬりのひささくら
殿と 舟の妻 船くる 櫻茶を

芭蕉
其角
秋風
如泉
支考
李風
嵐雪

足ぬとをさくらさくら 是る 菴二
一枝のちさくらもさくら 山はさくら
あはれつきの 魚やまもせや 櫻さき
雞の声もまきゆる 舟まきくら
屋形さくら 上社の 櫻らり 舟けり
考の端は 崩さくら 舟や山 櫻
食の肘えれあひまらや 舟や 舟
櫻さきと 舟あひり 舟や 舟
さくらさくらと 舟の 舟 櫻さくら
葛藤の名物とらん山さくら
筆ふらと 墨 染 櫻かとはくら
ぬらりもせん 葉て 舟 舟さくら

杜園
尚白
利牛
凡兆
杉風
丈草
野坡
梅舌
荷兮
李里
徳元
重頼

初様

素勅せよ芳野もたけふ江戸様
 涉法座のともめつゝるり佇勢様
 温石のあつめ、夜まやちのほくら
 七夕小契おきそしちのせくさ
 小僧まゝり上野谷中の初様
 教ふ似ねけつるも出よ初さらら
 ちの様え物のうらさ海とせん
 供ふれもどりふこそよきちの様
 人の氣もかく窺つゝ初さらら
 素座や木ふりと虫屋とちの様
 頬白の鈴ふるかこよ初たえ良

素堂 宗因
 露沾 鬼貫
 芭蕉 素堂
 去来 去来
 沼荷 沼荷
 圃指 圃指

八重様

遅櫻

奈良七重七堂伽藍八重様
 花垣や雲もね光の八重さらら
 ぶてまけいづくはまゝん八重様
 ハを様東もも後る奈良葉なれ
 ぶひてよき七重の纏を八重様
 万日の人おちりともや遅きくら
 さく花やこいの下まなほ遅様
 誰母そむに葉敷くるおとさえ良
 紙屑やとろくゝ小おそ伝くら
 はうれまをまろやとひうせの遅様

芭蕉 鬼貫
 鬼貫 其角
 祐甫 祐甫
 柴葉 柴葉
 常久 常久

元日

元日やおひのへまひー秋のくれ
 元日や月まね人のほーの音
 元日や海くくくくくくくく
 元日や土流くくくくくくく
 元日も旅人をええる驛うぬ
 元日と明とぬーたる霞うぬ
 元日の木竹間の競馬はゆりし
 元日や夜ふくき衣のうら表
 元日やまきとんるは梅のうら
 梅の香の筋ふまよる初日くれ
 亀の脊小海老ほのめし初日山

芭蕉
 其角
 去来
 佑徳
 一笑
 重五
 千川
 猿羅
 支考
 鬼貫

初日

初雲

新玉

着衣

濡りろや大くくくけの初日くれ
 朝紅や水くくくく初めくく
 枇杷の葉おたふたしうまり初霞
 何と玉の馬もあふり初くくく
 鳥の髪西ゆく玉の年くくく
 あくくくくくくくくくく春日
 寒ゆありてきくしの綿やまきと始
 母くこの紋りくくくくくくく
 初くくくくくくくくくくくく

任行
 鬼貫
 斜嶺
 嵐雪
 鬼貫
 自室
 宗因
 山峯
 しく

初夢

はのまや額、小あはは、扇子よを
ゆえ明て浪のり、あは、や、泊、地、寺
秘ゆりや、蹟、名、の、地、れ、今、の、ま
くら、夢、又、の、よ、き、あ、ち、や、こ、う、日

其角 嵐雪 越人 隈光

こよみ

下りり、ちふ、み、し、ま、の、こ、こ、み、う、ね
伊勢、舞、み、ち、れ、お、く、ま、て、こ、く、れ、り

徳元 幽山

まゑ

くら、くら、の、や、新、年、ふ、く、る、ま、五、弁
春、ま、ち、や、星、の、中、う、ら、松、の、色
年、と、ま、と、くら、天、の、戸、や、あ、し、あ、る、也

芭蕉 鬼貫 正式

今初

の春

春、は、た、く、急、か、く、夕、の、と、排、の、い、ん
我、等、の、式、う、宮、あ、り、ん、る、や、り、さ、れ、ま
今、初、の、春、あ、孫、も、有、る、も、有、情、を、あ
り、さ、る、供、も、つ、ま、り、し、り、こ、の、も、あ
伊、勢、浦、や、お、木、は、体、心、今、初、の、ま
け、さ、の、ま、海、は、は、と、あ、り、ま、の、う、ら
袖、さ、り、て、松、の、葉、舞、る、く、ね、れ、る、る
く、は、の、春、寂、し、け、ら、さ、る、閑、の、那
佛、より、神、そ、た、く、ま、き、け、さ、の、春

身堂 嵐雪 此彦 龍洞 西桐 梅言 冬松 冬松

春の

二、日、あ、も、ぬ、く、り、い、せ、し、る、急、の、ま
稀、な、年、や、日、も、ら、く、入、け、の、む、の、春

芭蕉 李吟

後代
の事

おりろやびの初折の花はま
まの糸の多いところをのそは
ふれ人のまのしをけま
五十少て四谷をこころのそ
響の形てい達しあてもなれま
背くらありのをせそや糸のそ

昌陸の松とんは手ぬ御代のま
治とるまやアんとく門よの春

福寿科

福寿科 すりのはしをなり
く壽草やハ羽この梅は花

宗因 惟然 古梵 嵐雪 去来 野章

利重 正式

言水 萬凡

法慶

新島の湖まらふ夕紅まは
長松の製の名てまははま

宗因 野波

門松

門松やうし海もわら武庫の山
うら門の松をそめてさうりま
門まうもかさゆきまあま
まう門や二あまそ門の変
門ハ松が葉園の雪ま

鬼貫 宗因 正式 徳元 舟泉

うら

山柴ふら白まは竈のそ
くら白もまちる神の馬色

重五 胡及

標

ゆけりやあや次や小家の大かきり
標の世阿弥まうりや青かきら

立圃
嵐生

大福

大福くや淡路もみさか茶臼山
大ふくやけふとてきり江戸茶臼

鬼貫
止安

菫固

とがとるやとんえさして水の恩
菫固や鹿書の神代あらんやと

言水
直良

書物

書物や行年七十掛洲の位
ゆとりとやけふあまてまじゆ
まそのもまらるや鹿のまをかこ

宗因
其角
貞室

屠菫

ととの酒のあやま系の小竜うな
屠菫酒や武彦舟も君り万葉齋

季吟
正隆

雑煮

さうぶ煮や五代の数くそか何を
庭寛牛もさうぶをとりりきり

とて
其角

大著

ちきや和泉の堀本まのまきり
ゆととやを敵の役村おとて

唯竹
秋坊

萬

字

まんさのやの富士の山まのけのま
流れてまてふあまのせり万葉樂
万葉のやとを隣おとて

青雲
一井
荷兮

蓮菜

蓮菜の穂もよるや芳根の妻
蓮葉よかけくかきや若れ袖
蓮葉の山城密柑やふかし
蓮菜や船の通れかへんを

其角
去来
維舟
端水

鏡餅

古きよ日よとせとるは鏡餅
いふ夕やよね一汁料の鏡餅

宗因
貞室

若

若水や九年の清々色を
若水やよふくくき若水
若水をうらむてらよ雪の掛
若水も鰻のよと涼しきよ

風鈴
武仙
亀洞
其角

玉

年よとどれもよてもえ方の
玉よとどれもよてもえ方の

可夢
徳窓

遺
羽子

羽子板の繪松葉節やかとの春
羽子板の繪松葉節やかとの春
羽子板の繪松葉節やかとの春
羽子板の繪松葉節やかとの春

季政
満水
吾仲

糸

生死れむらゝ男とと水ららひ
生死れむらゝ男とと水ららひ
生死れむらゝ男とと水ららひ
生死れむらゝ男とと水ららひ

其角
丁我

子れ日

松脂かた膏薬の子れ日
松脂かた膏薬の子れ日
松脂かた膏薬の子れ日
松脂かた膏薬の子れ日

貞徳
李吟
貞室

小松引

押ひくやあ孫このりる 姫小松
加賀小松引や越中おはさき
引つとて松をくちおは荒うな

宗因
幽山
其角

七種

七種をこるんうくこも自う那
七くや跡まうのう朝かふと
七種をたきたりて泣ふ哉
七まや粒ひあつてく切きこふ
七くまの枯まふおある草穂哉
七種はまぐーとめてや七ひまうー

嵐雪
其角
俊似
野岐
沾徳
貞室

薺

まの草

四方より河薺しきとるりてはうね
六日八日中七日のなつ川をうり
うかれきて薺をうり神楽市
一年の公拍子まを川をうり
風流つて石もささるる薺の糸
薺うね薺うねをうりお蝶
草枕を川をうり川人財とハ人
まの板おまうー薺の青まうく
誰う家の薺油をうりまの草
おあつてくくさるるまのうさ

芭蕉
鬼貫
舟竹
無論
嵐雪
其角
山川
此筋
鬼貫
來山

菜若

隣はくらしくためひくる若菜我
 其の野ふはくくろめてわろく菜摘
 きくくくと雪付てこまけり好春り
 梅と若菜よりこの宿のとろけ汁
 ころ菜摘めとる木を割畠うな
 うかれ雀妻よく里の船けり菜
 一かふの牡丹ハ寒きま若菜う好
 くら市やまふ漕くはけりな舟
 霜と若菜は雪に樂とる若菜哉
 猪出して摘ともいふえぬ若菜の那
 吾らうも残してわろぬく若菜うれ
 雪をまふ若菜をわろは若菜よの自

貞室 鬼貫 未山 芭蕉 越人 其角 尾頭 嵐蘭 嵐雪 野水 素秋 素衣

芥

女出く踏く川跡のころなう那
 我らめ々鶴とこのころをせりの食
 はくは若菜芥梳はなう是のな
 摘よりもえん若菜ひまも根芥其
 芥摘とてこけて酒なれむとくれ
 初麩やあ田の小芥うさと氷
 芥はむや歩行一とまこめてけ
 名也けり芥の白根のかみあふ
 地の底は雪引出と根芥の南

小春 芭蕉 其角 亀翁 且蒙 定耕 野徑 幽山 貞室

梅

梅の香や海よりくられてうきをのちね
梅の香や乞食の家ものそく梅
梅干しやうきつてぬる梅のそく梅
さうり形く梅のそく梅のそく梅
病後の庭く梅のそく梅のそく梅
梅の香のそく梅のそく梅のそく梅
おりのそく梅のそく梅のそく梅
瘦義や作りぬる梅の軒は梅
さくくふ咲そく梅のそく梅のそく梅
日あつりの梅さくく梅のそく梅のそく梅

芭蕉 去来 其角 嵐雪 野水 曾良 越人 惟然 千那 野坡 支幽

梅

花白の梅も雪双のこころをうき
あつてさく梅のそく梅のそく梅
北面のそく梅のそく梅のそく梅
星と梅のそく梅のそく梅のそく梅
梅一本は梅のそく梅のそく梅
梅をさく梅のそく梅のそく梅
白雲をさく梅のそく梅のそく梅
梅のそく梅のそく梅のそく梅
あつてさく梅のそく梅のそく梅
梅さく梅のそく梅のそく梅
梅さく梅のそく梅のそく梅
梅のそく梅のそく梅のそく梅

宗祇 負室 季吟 宗因 露沾 鬼貫 竹亭 鷗歩 万乎 利牛 曲翠 來山

柳

ちれりの柳のさくらるるあひ人の那
 下風よまうしてありののやまきさる
 池あみみとりのをらそくやまきたか有
 夕あの日を折也中りて川をこふ
 柳うみのとくねるといひうさ日の月
 沈ふ橋さーかふるまきあふ柳うけ
 おひい出そくりのあつかりき折うま
 傾滅の賢あふふこのやがまきう南
 目あふ杖はく暗や折のあ
 昔折のううしてあそふ板戸う好
 引よせてそまーかひさる柳のうま
 何ともなうとさひりやまきう南

芭蕉 負室 宗因 鬼貫 李吟 素堂 戈管 其角 嵐雪 去来 丈草 越人

柳 春 草 柳 春 草

尺ぐりりくやうまにぬる柳の南
 そうれく柳ま風もどりけうん
 ようと川極とを流なまき柳のあ
 朝日こまかあまこのうとく白ひうさ
 と結りをもついでして植一や形さ成
 障子と一月のるひうを折かま
 町あうくあうらう宿のやあたうさ
 せましのの尾ハえはけさる柳式
 やあのを雪折をうりもすうこの都
 好く風も牛のうまむく柳かま
 青柳れあうれや豊のまみとる流
 ちううへまきあうもまー指やうまき

小春 向白 荷分 湖春 素龍 利牛 杏雨 探丸 春水

野老

とこよきき声天糸のまじひあり
あま毎ふらとや野老や中の中
いあーくや今も丹波の鬼ところ

其角
苔蘚
真丸

下着

下着や尾こそとゆるのこり雪
下着の氣をそけぢや其の香

二川
李由

若

草

若草十やまきのあひ箭も木綿を
けり草ふら川流るまじや丸くま
立白よ若くこころる川をうま
つらつはまのふあーの手や二正まで
若草まじけり春駒のこころけり

良角
野坡
亀助
問津
良俊

椿

うらひまのらまおとーる椿のり
曉のほろへおあうはつとまきう那
藪ふくく蝶まのほろね枝のあ
銀ふかふまふんせく若つとま
あま王の雲目まふつとけりま我
枝まうく伐らねまふひを枝のな
ちり椿あまのめあさうお續てくる
取あけてるやや椿のあそのあな
徳の枝くまふとあまうつとれ我
口紅のちり花ゆりーまはつま
土まふ羅ふちりぬつとれうま
飛入やかの海底の玉つとま

芭蕉
荷分
卜枝
嵐屋
車宗
湖春
野坡
泪木
残香
鬼貫
孤屋
宗因

紅梅

替

木は
芽

紅梅の涯ふと一香の添小袖
梅や紅人のけとらひの初かみ
紅梅の教くや仙家お庭の雪
お梅やよる夜更はくら玉をこ
紅梅やかの銀閣寺やふれ垣
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺
そやされとさるぬ梢も木の芽哉
木の芽しつる雀かくれやゆひあり
うれしきも去年の残穂の木の芽
まのめりて四時をさるれ芽まき

立圃 鬼貫 元永 芭蕉 泊徳 蕪村 露川 均水 野蝶 玉鞅

若緑

落の
塔

莖
とら

の免やうと入神の連ねのしり
くろみくろり神のくぬ松ひねり
黒むとの雲のくもやまのくも
駒とたてて雪えは僧ふ落の塔
晴まきく出堤の切目や落のくも
生てある落のくもくも山路くも
くもの白ひ紙燭清てもぬきのなる
莖くもくもやむ條あくもくもまきの
まきのたりそ蒸くもくもくも
酒賢く人莖くもくもの園ふかれくも

鬼貫 末山 土芳 其角 拙候 即章 調竹 百里 野徑 一露

五加木

喰ておのまややくていりませ五架飯
うきき頃とやらの客をのそきりり

鬼貫
几董

す
の
き

何のきもはうねい去まの草の角
福あじしと馬あらのうね草草
おのけふおのまふうく草うね
草叶小端あひひいあまやこれ
は夜場の頃より内入とまじり
茶前くすすれえり知と童
堤よりあうい流れはすくれのる
松うけもさくく硯のそととこの那
とくねるりりのそまふれ七草れ

忠知
荷兮
夜章
曲水
野坡
鳴歩
馬草
如負
その

教州

はく
し

刺

たんちのめさいてうかむの口のみ
教草やうそそそのまふれはく
あんけい物のしこの日を伴の性
まろくと楯やはまのれはく
はくしし頭巾にふるか知のり
まろくと親子はみろつし
春雨もたつきおたりし集
まろくと紫山子のけろく大等

普松
栄春
衛門
其角
音山
舟泉
元志
蕉笠

行蝶のとありのとまなあさこ
をらうこの野田のあさこや院形鬼

燭遊
三丸

木瓜

草豆袋や野のあつた木瓜の香
かけらふの底で燃や木瓜のころ

銭蓮
芦文

角

ゆじまへゆく角と濱の芦
はのくわやうろの鬼のちり后

路通
勝重

接木

捨物小梨の接穂や山氣き
はま下のかくしう接穂成
世の中をまうんかまうね接木成
長れさや接木ハるねの咲おくと
一方と梅さく柳の接木この南

芭蕉
傘下
淳兒
清門
越人

獨活

雪間より為紫のうらまきう那
せうしをたえハ瘦ゆりの根ハ獨活
いとゆめ白ひまきのとせはくろくと

芭蕉
嵐雪
配力

茶

摘

うらゆまを屏風かぬる茶摘れ
柴舟の里ハ茶梅の水けうて
藪の根やあけてゆり生と茶摘唄
あうまきや茶山志おひらうぬつれ
たうの尻もてる日とるふ茶摘哉
旅人の一筆あたらまる茶つこく書

鬼貫
其角
去来
正秀
委茂
杏西

菜
はる

菜の花や一本咲く妻のり
山女の雲菜れをのり自らや
なみのむの小樹を角なり
菜の花のゆくははる日影の
なみの花は出づやねりまはかき
かみの花や枝菜の土手のあひくふ
菜のそよ風の畦ら残るまうら
麦のそよ菜の花かたのあひくふ
舞有や天氣定ちて種あう
古河の流とて引つたねあう

宗 因
色 蕉
其 角
傘 下
園 水
長 虹
清 洞
不 悔
其 角
蕉 村

種
卸

桃

我友も伏見の桃のあけくせ
菓子もよにけり人形や桃の
おのくの桃のいしうや等持
ひくふ桃のふのふやあけく
あけくも子もあけくのことや
桃折くふりあけくや女の子
りのりもさ境もあけくね根
日の入や舟も見てけりあけ
金柑のまこと盛りあけく
梅さくらも中もあけくあけ
角葉の餅もあけくあけく
梅の歌もあけくあけくの酒

色 蕉
其 角
嵐 雪
桃 隣
傘 下
羽 紅
鳥 巢
髪 鬢
水 鷗
鬼 貫
負 室

海棠

海棠の花はこぼれくさる夜の月
海棠の女許と稱とかかふる花
海棠のほろめたる花は丸藤の家
海棠の花のうつやあはる月
海棠やあハッラちやと堂の花

普船 卜宅 豊重 其角 史邦

連翹

れんきょうや茶山吹を捨さる
連翹や折ふあふふ牙咬み
とんきやうの白ひくく庵の風味ふ
杖のゆとくハ立たりさりのくや
志のくくはまに似たり梨の花

巴静 麦雨 峽水 鬼貫 許六

梨の花

ま山やけいふ花はさる花
花のくくはまに似たり梨の花

野童

杏

あけのくハ杏のそるの
杏はとくはや甘味の一十の月

貞徳 暮四

辛夷

あざもこえとこやうの花なれ
ゆるれの花はふくりるあふく

羽長 梅車

木蓮

あけの葉せんをねん天目ねんけ
物のをね花やうりく木蓮んけ

貞因 安静

竹麥

草ひまやひそりく上はあれり
くさまの葉はひるり類の夢
一胡よ一はくくけやまのいろ

鬼貫 治後 春水

苗代

苗代よ志のちうふや尻ととき
 うらうらや府匠のぼる畔傳ひ
 迷うらん苗代ころの田北福を
 苗代や八重垣はくも出雲織
 人形へなるうらまのりもたてうね
 苗代よまうやかくるの奇の種
 なるうらや此土をかへて隅田川
 晴道やうらう射の角 大師
 やとくや苗代まふあくる 風
 苗代や流居人行てまははえ
 むとくや流居の様ちりふり

嵐雪 空角 氷花 木也 元春 徳元 資仲 正秀 仙化 鬼貫 芝村

蕨

藤

早蕨や流谷の雪ふふととら
 里人と相まうととらや独活うら
 菜刻さの上ととら蕨この角
 志るらんや久菜のまら山とら蕨
 とら人ふととらとまらまらら
 関ころとら愛もあしとらさ我
 白蕨と破味あしはとらふ常うね
 小坊とらふ足なけからん松よ藤
 風なうて静とらまらうらあちの巻
 友の柳やとらとら人のまらね
 松よ友鱗木ふのほらけとらあり

貞室 宗因 其角 幸順 勝政 宗祇 其角 嵐雪 杉風 貞室 宗因

山吹

さしこころふも居の後のほろと哉
ととも世と夜ふ深と一墨こころも
山藤のめとのゆくみ成根の角
めくらかく岩くらやや夜のをま
夜やた君もふれくる望をくれ
山吹やまきよさきとて枝のかる
月雪ふ山あきと花の素顔よ一
山吹の夜は黄令の肌志の角
やまふれや垣ふ丁より暮一重
一重と山吹のそく女詠うれ
山吹もちるうみふの舞さまも

荷兮 宗派 去来 丈草 七の 芭蕉 生角 季吟 園指 繚雪 酒堂

は

は

さりのたて山吹のそく山根の角
山吹と蝶のまきれぬあしうね
かまうまきやとえあふ流の玉うら
山吹やまきとて樹はあのとこ
やま娘まきやた久て流る花の水
花ぞととわりふとりく赤けし
裾山や虫吐くあとの夕灘燭
亦これより木を二見のつとる
白ほしき糸やまらう角の橋
ま一とらひとふかきやつー山
さしーのそく窓へはくーの日足る

蓬両 十枝 貞室 鬼を 半段 宗鑑 芭蕉 共角 嵐香 去来 丈草

けしきいしうやうきる石燈籠
山つじ流ぬきよとや夕日かき
うらーけ、浪白ーまつじうね
花さけハるまもようや岩けし
あうーまつじの露や羊の乳

桃隣 智月 氷花 幸茂 負室

鶯

鶯ふ威あるうけのいやー
うらひとや氷ぬと多と朝日山
黄もや茶の木細の船月夜
うらひとや内のもまけの舞うる
鶯のい中とさこそえれ少うり
うらぬぬさの雪とさきと垣穂火

芭蕉 其角 丈艸 去来 嵐雪 一桐

鶯の意

うらひとややとや一声のあうり
鶯のや空のあうとさきと朝日山
うらひとや氷ぬと多と朝日山
鶯のや内のもまけの舞うる
うらぬぬさの雪とさきと垣穂火
鶯の二足よな門とゆあをさう
うらひとや声のあうりとさきと
うらひとや雪のあうりとさきと
梅雪や鶯のさきとさきと
うらひとやさきとさきと
鶯のさきとさきと
鶯のさきとさきと

溪石 魚白 鉄枝 野坡 梅舌 心圭 挑隣 桐画 山川 夢々 一笑 唯然

猫の恋

うぐいすやまふ丸お出る声のらふ
 うぐいすの梅の小枝よ葉真どくく
 黄鳥や園柵は霜の笛の貴子
 麦飯お中らるゝ恋の梅どのほま
 うき友にのみ目して猫のちらなうめ
 深窓の頬も紅あややひささう猫
 葉巻やくろえを猫のねりうね
 巳の脊火をうらふひまりかへ猫
 なれも恋猫よ伽羅燵でうねる
 足跡を妻とくふ梅と雪の中
 誰れとも柳うゝ歳を編む数

字因 鬼貫 負室 芭蕉 去来 牛寂 秋色 嵐雪 其角 沾徳

白象

猫のときあつきの見や尺かまひ
 うき恋ふたへくや猫の盗くひ
 のら猫やうかれゆくと秋の中
 うき恋ひ濃葉射ふのむつや猫
 白象小僧あつこそうくみならま
 あつ象や漢を結く葉よあひまら
 あつ象の紺あつるのよ水の泡
 白象のぬき白ひや秋のはし
 あつらやや象ふかく梅の佃し
 白象の馬や式給う大はやま
 白象や目よて色を白く思ふ

琴風 支考 支卓 野徑 芭蕉 其角 負陸 之道 拙候 荷今 鬼貫

鳥巢

白

雀の子

百子

巢をとりふるや世とある下造
巢かくりやあるまじのきり
巢をまーしきり子あはれ
鳥の巢は去年のきり
人あはれけり
蠅らちふ
荷鞍ふ
日の新や
際や
おもと
玉子鳥都
川上ハ

昌房
之次
一聖
鬼貫
鬼貫
河瓶
上芳
珠碩
宗因
鬼貫
尚白
其角

雉子

父世のきり
人らと
鶏の
何の
下造
高声
おひ
行か
身ふ
一
ら
ゆ

芭蕉
在角
夫未
丈草
嵐
一
千那
塩車
撤土
衛内
言水
鬼貫

雲雀

雲雀よの上ふやとくふ峰のりま
 あふのきよよ縁をえん野辺の雲雀うね
 胡こよふほしむさうりく玉根のそら
 追ふくく特くせけり夕むくく
 羽おらけをいへへの雲ふるく雲雀
 枝の本を定規玉のやん雲雀うね
 帆けいらのせとよりおらとひさり
 りあもまこ障子さる日を清く
 棠橋のさくやみおらる雲雀うね
 口とくと雲おかけぬるひさり
 彩虹やあうんひさりのちくく
 簞入をこくつ舗へあう雲雀うね

芭蕉 除風 丈草 翠袖 借橋 水花 其角 如泉 言水 梅盛 素堂 宗因

帰雁

そのめもつるも北の帰雁の山路く自
 あふくれやあうんかまうく
 ゆく雁や花も山きのさあか
 居啼てりのおあらるや雲の
 小田久さを鉄も柱やのく居
 かへる雁帰る紙る勢ひ
 去さわく今や紀のしほの雁
 行へあさくら下ふきけり
 まてや居をれて周防のねりけ
 ぬくを田螺ふらひてかへ雁
 かへる雁田毎月月の星る夜ふ

自室 鬼貫 水哉 未山 其角 嵐雪 以雉 儿峯 楓子 子英 長雅 蕪村

玄鳥

簾より入りて美人小洲を燕うの
糸をきくふ裏ハ法るものかひ
あそふともれどもあそぶ乙鳥
傘の糸をらからさうよぬ乙鳥
はむら下の雁も回てや鳴す
笑やあふまされし 法るめうね
いまあふこといわれり乙鳥
燕や田ととりかへと馬のあふ
巢の中やえと細くしてあや燕
からけりも下行るものつら
土車引くも休む法るめか那
船網よりあつ仲の乙鳥うね

嵐 瓦 去 其 丈 荒 俊 野 峯 桐 舟 巴
雲 非 来 角 草 彈 似 童 嵐 西 竹 山

駒鳥

鷺

麦鷄

琴のねの巢もこころは法るめ
老傍のつゆけりもあそぶ乙鳥
ころ細くあふつらぬるつら
こはまのまふ似合しき 白浪
朝のりや人見をそめて 鷺鳥の
鷺鳥のつゆけりもあそぶ乙鳥
機未ふあふつらぬるつら
糸の雪は法るめやうその琴の音
まはつらきあふつらぬるつら
あふつらきあふつらぬるつら

枕 舟 台 小 長 捷 園 三 山 沽 諷
志 春 虹 花 指 章 只 徒 竹

蝶

蝶のとぬらり野中の日影うら
移る蝶ようり ありとあるこころを
く川跡と兒のふしををふひり青
蝶の舞あつる様ふらり ありふ
とほりても 翅とらうく 蝶のま
蝶のまておとよ 移りけり 葱のま
初蝶もいそぐおく 春のこゝろ 二年あ
かやうのち中 秋土うら 胡蝶うら
枯芝や 花のまふら 行こころ
空を舞うて 花のまふら 胡蝶うら
沖の蝶 ぬらりとまてを 移りけり 我
世の中や てもとらうく ありかともあれ

推琴 其角 柳風 園指 柳栝 手段 好春 吹玉 百歳 雪窓 戈營 宗因

蝨

蜂

蜩

知ふあそふ 此ふらひそ 友とあ
この蛇が 多くて 遊んで 網のうら
人もまて 長き日 秋あれ 野の声
糸ささうら 蛇とらうく ありかともあれ
蜂の巣や 笛さうとて 花の盗まらむ
まらうとらう 花の波や 蜂の往かへて
山吹ふ 花のまふらうとて 野の声
とらうの 巣や 一回く ありかともあれ
野田村 あり蜩 ありとらう 花のとら
石のつ 清きまらうれや ありかともあれ
蜩とらう 知れども ともて ぬまのたれ
ありかともあれ ありかともあれ 胡蝶うら

芭蕉 其角 星泉 乙列 杜洲 園風 沙鳥 蘭二 鬼貫 其角 虫亭 妙真

蛙

古沈や蛙とひとむるのあと
よ〜ま〜やまとの暮とひかろ
田の畦や蛙と脊負く啼く蛙
ちんちん蛙ふそめるあま〜の南
松風とうちこ〜て々〜蛙の奈
山の井や墨壘のこ〜とふく蛙
ふ〜つ〜て柳水のゆるか〜ら
ま〜ろ〜と我頬ま〜りの〜門の
ゆるま〜あ〜つ〜ま〜あ〜鳴か〜門
ゆる〜ひ〜蛙は〜も〜浮き〜あ〜奈
尾を〜く〜ま〜啼ぬ蛙う南
とま〜の江や火と焚舟ふ〜蛙

芭蕉 嵐雪 去来 其角 丈草 杉風 工齋 嵐蘭 越人 仙化 蚊豆 天磨

田螺

蚕

自とほりて昇りあがるか〜ら
から井戸へとひととま〜ひ〜蛙
昇の道ふ〜れも〜あ〜の〜我
袖よ〜とら〜田螺の海士のひ〜と
入るる 蟹も 死ぬ田あ〜から
里人の騎おと〜る田あ〜ら
行きの中ふ〜るや田螺と〜り
景政々 比目とひろ〜た〜我
孫ともの蚕中〜る日 向〜南
産ておき〜て〜と〜る蚕哉
とま〜あ〜と〜るの羽か〜ら 蚕

宗濂 鬼貫 宗因 芭蕉 丈草 嵐推 丈浪 其角 其角 知足 陽和

善 鮎

鮎の子は白魚かゝるけり
鮎の精の一葉も足らぬあり
水澄き一網の目もき小鮎を
鮎小魚を鮎の葉が乳房のち

芭蕉 戈磨 重政 素堂

飯 鮎

いひだこのかめいやめれて果るけり
飯鮎のかのれ是くふ河内越

末山 泊徳

落 角

一の谷をちやまゐる徳やちと一角
角もちて大とみまゝや庭の麻
つのは緒一カやちつるあふれを
角もちて之日をくは男麻うお

一夢 琴風 近之 朱批

佐保姫

こゝろひりや京うらへへの奇の川
佐保姫のほくも硯や筆の海

可理 如流

ちんき

ちんきてふ家初らけは是のちん人射
いづくや大和四月こかきま
昨よまを貝酒のれありちん月
待中の四月ちんやちんり月

貞徳 鬼貫 言水 揚水

たき

たきこころあまきこまきこたの嵐うお
まきまふたの月夜お柱人まき苗
二月の雪とけておつやとちも川
まきこころきれまきこやまき蝶の羽
まきこころまきやちのちんちんちん

芭蕉 蕭山 之次 惟然 千那

弥生

誰國もやうみの海の道千筋
三月やきれけりまは粟下木
さくさくちる流生五日ハ忘道ま
富士小流のて三月七日八日

露 去 其 信
沾 未 角 德

尤我老

左義長やこと一の相成帝狐
尤我老のそりあもやとら鹿水

旭 幸
芳 以

霞

小泊徳や眼鏡もよその嘉我
あふこもももくも網あはまうは
里かきおゆふの松のはりのか
行くて程のからぬうとみか

宗 鬼 野 壘
因 貫 水 交

花とゆて移へ志こころのまこと
三帆舟と塩尻あううのひみ
えうとよふを寝るや一タかき
流さくや歩もゆるまこは鹿
破見得とすまうかこるを煮
つこをまてかろけ火持うと
浦くの空お帆かろのまみ
我宿もよそよりんねん鹿
八重かきと奥まてこは竜田

嵐 其 越 岩 子 冰 風 月 杜
雪 角 人 翁 英 花 洗 下 園

朧 月

唐突可の松と急よりおぼろしく
 夏のしづまよ闇ののけくの朧月
 大系や蝶の如く舞ふおぼろ月
 おぼろ月まことまきねる夜中
 ちけ山や籠の月れとまこと
 中川やけうてらんておぼろ月
 山のひやたけりよりのおぼろ月
 夕かまきみくまて朧とまきくま
 おぼろ夜を白濁りのまこと
 朧夜は雨あやましく人猿の声
 ねろろ月まきねるまきりうま
 朧くまきりまきねるまきりうま

芭蕉
 去来
 大草
 仙化
 式之
 嵐雪
 元峯
 嵐彈
 支考
 沾例
 女誓
 鬼貫

凡 巾

叢 入

物の名は朧や古脚のけうのけう
 けうけうや江戸次くまきねる凡巾
 系けうの人とあまきやけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう
 けうのけうのけうまきねるけうのけう

示因
 具角
 前を
 戈誓
 トト
 園風
 其角
 琴風
 専吟
 咫尺
 甚村

餘雪

花もまじく埋れぬ雪の餘雪の春
ひまの手の徒おきし山とら
傍心の嵐がさくまの餘雪の春
霽の戸は出跡ちひさぬ餘雪の春

足義
其用
野童
荳村

雪返

雷やひとむらさきのさくえかた
さくえくからことあつてめさるうさ

夫未
梅盛

燒舟

るる啼て燒野のあられさるうら
はやくと燒舟舟早き口ひく
山さると小松の猶も中け舟の春

乱糸
曲之
木

雪間

うき中ゆるりて雪間のよめさるう
光陰の矢間あけらるる雪間あふ
草葉の色は雪もふゆ雪雪雪
解とまて雪葉積るる雪間あ

とと
兼次
其用
万子

残雪

木枕の垢や伊吹ふのころゆき
かきと消て富士を標ふ雪胞より
雪残る畧獄さしき赤生り身
舟くの小松小雪の残了けり
軒の雪を盗人の多えの取のこ

大草
其用
言咄
且兼
貝室

東風

徐々東風入るる雲のひさきうら
暖簾よ東風ふくつせの出店あ

去来
蕪村

春風

春風や人声の如く
さる風をこもる雛の
まうせふねきもさ
けの風や暖こし
母とうぬの法師の
此國の賣花人ま

芭蕉
菖子
龜翁
未未
来山
善村

雪解

雪消て大声雨
松の雪ききこ
雪しるや蛤の
さゆる川の氷も
氷消る風おこ

沼徳
桃隣
春洗
木白
路通
との

春雨

春雨や何うら
ま雨や何うら
るるさあめ
まはる守我多
けるさあめ
まさあめや枕
状らねん江戸
春雨や流す川

芭蕉
史邦
村紅
後雖
丈草
堤亭
秋色
芥舟
其角
支考
愚貫
貞室

春 雪

酒をたぐねられてゆきりり其の雪
淡雪や兩ふおろしをほほむ
ふるけしとこところハ初と春の香
下庭の氣多とけきとやまのゆき

来山 風麥 近重 李由

去 日

かき山やけりくくし門はま日くれ
まの目や庭ふ花の砂むく
如意崎や新もかきま日新
船橋もま日かめくむのあや

負室 鬼貫 其角 派徳

春 夜

其の夜や草津を鞭の音とより
春は夜ふ尊た山雨を守り

其角 蕪村

春

海

春海やを轍ゆきまのまのこま
えはく行遠山雲や春は海
松崎や旭もゆきとれ

素堂 芳川 不卜

春の

月

其の月琴子物かくもけり
庭うらハ雄客なりりり春の月
春月や市合堂の本は間より

其角 泊徳 蕪村

春 夜

鐘はらぬささるゆきまのま
を鏡て淋しめとせんまのま
赤猫のうらまゝなるぬまのま
急や根もまゝはくの春の暮

芭蕉 普船 山店 負室

春の世

らりのあたる銀のひかりや春の世ら
らりの野やらりれの世ふらふと人
世の世雀をせとるす世世う有

杉風
羽紅
負室

春世

らりの水も秋の本れ世をせとる
春世もあうく世書のの世世しら
物ゆるー魚の兒もれ世の世

嵐雪
其角
石徒

水ゆる

水ゆるむらうや手鍋もむりも
汲ふ出く髪とく水のゆるこう有

阿漕
文水

海雲

りつくと海も近き朝日こ
まのあたる海雲まらーうらう有

峽水
抱月

海苔

かきよりの海苔と老の妻もせて
海苔とくく水の名もくく都
人のくもくくくくくくくくく

芭蕉
其角
杉峯
尺草

寒食

寒食のさくくくくくくくく
しゆの火もまゝ食の日月腹まそ
まゝ食や旅人の雪の路ままそ

桐雨
氷花
月下
其角

草餅

雨の草も餅とさくくくく草の餅
伊吹山も餅の餅もくく餅
くさ餅もくくくくくく餅の餅

芭蕉
政玄
埋然

陽炎

枯草やまうところうらぶの一二寸
 うけろふの抱付いづろころもう
 かまろやや巖小こけけけら
 陽をやまのりもつて戻り駕
 うけろふまさ一矢の沈む中
 ぬきろふの登しを炉中のをさう
 陽をふ隣の葉さへともふり
 うけろふ障子かまろふ金屏風
 陽炎や小磯の砂もふまこを
 かけろふは夕日にいづたはあり我

芭蕉
 越人
 配力
 去来
 山川
 連暑
 丈牒
 普船
 其角
 舟泉

系遊

系ゆふもむとひはけけるけろ
 けろと系遊やまのゆきを
 しと遊やみくまを席の人柱
 系ゆふやしをぬしと係
 けとけや左の人免るまけの

芭蕉
 乙卯
 氷花
 鋤を

二日灸

小窓窓るまの日うと二日灸
 二日灸をころのち大なる

その
 儿董

ちん午

初午もまの錢よみハ芝居うら
 と門午やあやせぬつあちひと
 はのちや鍵をくつえて戸
 初もまや稚もまたうちつみ

其角
 支考
 野岐
 川支

彼岸

御忌

夕の午やほろり小霞を通りの筋
初午や妻の影も素浪人
夕の午や役の行者はあな踏次
初午やその家くの袖とみ
精進をふとひそれ一歌の日暮る
彼岸少くひうん橋のちりもま
渡し舟武士ハたてきあふ彼岸
橋さくひとくみ弥陀のえんか系
御忌まわり都小錦珠数袋
御忌の鐘ひくくや谷の氷ま
日小霞月五氷夕や山忌の鐘

左 圃
佑 徒
壺 月
蕪 村
末 山
彫 棠
其 角
支 考
言 水
其 村
儿 董

涅槃

西行
忌

神垣やわりのひもかりき涅槃像
さる母と小午と小物とさうり佛
孫子あはとらるるをそを死福をん我
きそつたの口秘もうや十九日
このむしや常のまのまき涅槃像
ねとん命もははらうふ赤死日の光
天人も泣教もろろ一秘をん像
釣障の大あやられ涅槃像
西行の死出路を旅のはしあう船
舟りよ彼岸さくくハ堂しふ

芭 蕉
宗 因
菽 子
鬼 貫
野 水
言 水
已 百
希 因
其 角
杜 若

永

日

永き日此遠近人とならふよや
賦法のたをきこく教日を長き
日さしはへまらるる運き瀬田の橋
永き日水遊ひなきしり文津る
なつた日や子小はゆいさくく

芭蕉
元峯
許六
宗因
鬼貫
道春

出

代

出かろりやその門は雛辰の市
お祭りや照日ふ下結をそいで行
出ろりの回やあそふ花のとれ
出かろりやはその泊り遊女の果
お祭りやあいの分るとをかられ者
出ろりの小園司土左の鳥籠成

嵐雪
知足
浮洋
幽山
曇言
肅山

雛

出かろりや人おくせらも連気くら
お祭りかいろや繁のゆいくら
出ろりのやはるまめくと古鳥籠
草の戸もそみかを代を雛の家
詠うまてあそぶや都のあそと多
こころあそぶや都のこころあそ連
隣く雛えまら侍く小家うき
ことりて移ひまらりくら都の京
夫婦雛むとえのとらひうせん
幼くぬありのあひなりうあ雛
山崎の櫃うらうこまむる遊ひ

其用
木導
荻村
芭蕉
車未
鬼貫
嵐雪
其角
達暑
霜白
トク

鷄合

赤いのは五佐此土しりとり合
あやとり此柳子ふもろく逆毛共
勝鷄の世をまぢ尻非抱進ちり

其角 言水 君里

錦

改下

現あふむ比目を踏んちほ下うね
改下られて蟹う裾引なちりかれ
人うまむ舟と陸との改下う有
赤川お富士のかけなを改下ん
を深まろふの改下や田植く
帝わと赤川おあうあ、ちほ下ん
管籠うりて改下人の改下ん
ゆふろふ足めとはる改下か奈

其角 友重 園指 介我 沾徒 如泉 挑女

美刀

曲水

畑打

一の洲へ都の客と馬刀とくふ
多雲の馬刀くきよれん筆の鞘
曲水や岩もろくろの崎のり
あふよ椿さうね山路の南
畠ら門おとや嵐のさくら麻
ちうくくと畑打そらやまのめ風
畠打や傍一雁此のめかそり
畑うやうこうね雪もろくろのね
をさ打くはれまの爺や川白
加ら川やむろくろ志賀の都人

鬼賀 嵐雪 其角 希因 大兔 芭蕉 好風 路淡 荦村 秋之坊 乃金

長閑

人の世や長閑なる日の寺林
肩負ひの世ふまりぬ冬閑
のころさを物もむりぬ朝露
長閑さや空ふらぐもさる声

其角 冬文 杜國 雨什

刈霜

ゆく病みつれなき暮の別
初夜後花の結つた中じり霜

千那 松吟

峰入

峯入や一里おらあや小山伏
うまは花踏て刈素足う有
峯入や雲ふ起卧とま人もあり

芭蕉 六亀 重頼

行夷

行まらや多の帝魚の目とらみ
ゆくもや独けを雄島のりとれ貝
明ぬ間ハ星も嵐もころはりら
初らる小底のぬけうた核う有
うちあふぬ名を引春や歌あふも
引春小頬ふなはかり門う奈
ゆくもやもかほ顔の野守う船
行はるやをさるふはく鐘の声
ゆく夷の夜を結ぬ歌の離うら
行まらや横河へのあふらもの神

芭蕉 其角 丈草 支考 暮四 湖春 野水 山川 鬼貫 芒村

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 春, 山, 川, 水, 花, 鳥, 月, 夜, 風, 雨, 雪, 雲, 霧, 霞, 虹, 露, 霜, 雪, 霰, 雹, 霧, 霜, 雪, 霰, 雹.

時鳥

古人續五不類後句集

夏水部

うらひまの娘うらうねわとくまは
は多く水鷄ふなう人郭公
ほととぎす大井原をり月夜
夜の媛さゆひ白く本まき
なつこふさへ美つうらふ子規
なせうれの聲つうらひうらとくを
蜀魂うら川から淀の水うらま

守武 宗鑑 芭蕉 鬼貫 志て 負室 一 幽

在唯のおめであことやちとくふと
御成筋いかり休まを子規
ほとくを神楽の中を通り
親を谷子ハ山のねほとを
泣けあまふ啼り野とく
竹をその目くのそつ絲う有
杜宇とぬ夜かさうかしら我
ううやあそ山久とをわ々蜀鬼
とひあんとまうみやこの子規
馬とらぬうらりの合さりのわとく
くわりのわいんうあしきま
蚊をくまき森さめうつや時を

其角 嵐雪 女札 正由 利冬 尚白 宗因 去来 犬草 鈍可 傘下 一繁

ほとくまことそれうふま野の度
あひし子のほまぬきわや野公
日あひ昔紫山をとくまはるる
ほとくまきん一声ましは雀の声
石昔の朝雲かちし本とくま
四五月のうらみとさ浪や舞公
布とくまを女まうと定まふね宵のを
松島や松ふ身をうれほとくま
星知とりの啼うしあや罵る
杜宇なう後なるな月夜うな
湖をとくかかこやあとくたを
知はまてはさのまらとくと子規

柳風 松下 素堂 杉風 唯然 詩六 卯七 曾良 團友 朱拙 樵先 智月

左羽ふ山花ぬけはほろろきふ
郭公あうぬ秋志路朝能は
雨の間に常あま死りのほろろを
耐ふるまうぬころのちりもわり
おりのひこむ森をわぶしよ郭公
啼くくまもなひくくおとを
付鳥窓くらうしくくんとあ
昔らもや舟形くくかの子規
高きもやあれくお中の杜宇

野坡 支考 風 荷 北 秀 若 瀧

閑古鳥

老鶯

啼物してとめ口老鳥ねかむこを
谷こしや空ふく風のくくこを
閑古鳥の声お厭うる山崎うま
かむひの淋し啼けの淋しかんこを
風ふくぬ森のあけや閑古鳥
極きては山田も青し宗古を
かんこを啼や蛙の目かりとま
草臥く芝中縁ふじ閑古を
山中やうらふを差く小六ふし
口老の似や老の鶯のむくこと

釣壺 鬼貫 糶界 其角 舟竹 洒堂 正秀 支考 宗因

鶯

うらひさの音を八の中ニツ星
鶯や春を啼こんと草叶

嵐雪
田水

渡雀

うら鳥や日のさし廻る夜の庵
よききのりも小野といはれ渡の中
結るしの羽ゆれに我ときまきし

錦水
行雲
芭蕉

翡翠

河せみのとよよ麻でり蓮の形
翡翠平に折うけ竈の支流う糸

業言
西花

羽枝

羽ゆけきき亭者そりもつこ崎
そころもの松をそわや羽ゆけき

其角
希因

鶉

くらね鶉のちびり小のりも川
鶉とそりも水をくくく行
貝物の火中をくくくあり鶉なる
簍望もわら鶉はくくや川おし
曲江の舟のくくえね鶉も南
先舟の鶉もかまのね鶉舟の糸
鶉はくくひの斤手くくくくく
鶉繡をくく淡まきや二とあり
鶉数小早瀬とみゆる鶉うけ
かすあまよる面に鶉匠のうけをうり
らもはくく鶉網も眠る夜咽うな
あまうら鶉とせりくくくく

其角
急貫
去来
李田
梅鮎
淳兒
独卜
桃隣
園指
琴風
氷花
尚白

水雞

際さきとあまりのおちりみ水雞々な
おのゝ絲の尾やあ鷄た儀の園
籬守の宿をくひらふも同くうみの
めいとのもちらつくけり水雞はく
うし海より戻りかきよみあ鷄共
宵の口啼くも曇るや鷄くひる
水札啼て日乾ちろはく流の自
けりうのて神杉ととまきさうま
らち川や雉の浮巢ふなく性
亀の脊ふたうの雉の浮巢うお
鴨此巢にまき管かきと小西うる

土芳
本草
芭蕉
去來
半殘
北枝
一泉
尚白
其角
肅山
一棧

水札

あさるの巢

螢

おのゝ火を木くの螢や露のやと
あさる火や吹ととまきわて雉の園
簍はくて朝くふるふ螢う有
牛部くまよまきえ草のほくさ
けりうのて螢のうらや谷のあ
相のあま島さしぬらた螢うれ
草も木も螢くまきやあまの音
田の眠れ豆はくひけけくさる
かましきを生まれつきと螢う系
あびてぬれと袖のあさるう角
あめ之夜と下とりのり茶うを
夕園とけくもあまや酒ををし

芭蕉
去來
言水
史邦
正秀
万乎
猿雖
吟
水鴨

蠅

夏
蚊
し

うたへの蕨ふもかう人木若の蠅
 かほ母はく飯粒そ人よあこ人まの
 蠅よらるる眼よ力なれたる麻うね
 珠数くりにて蠅打人の片手こり
 浦風やゆらうねを人のいふは際
 人及打その手枕の縁うりこのま
 うらうらきまう子の魚は蠅うこ人
 苦しこや毎まふり行午の蠅
 電のさきひおしくや火とりひ
 あふ夜はや鳥もいぬろや火取虫
 夕まよとまのてまぬう火とり虫

芭蕉
 嵐雪
 子堂
 西軒
 依水
 已百
 紅雪
 九節
 犬草
 翠袖
 正秀

蚊

蚊
柱

電の蚊もはうとととるハ声うね
 蚊をよけて蚊の鼻やほととぎすと
 旅人やあうりき方の蚊はゆへ
 血をすけしりめとせらと蚊の勝さ
 蚊の群々細の一本の曇まきり
 子やうんその子れぬも蚊の合人
 蚊のやせく鏡のうらとまうりけ
 海やの蚊や御佛供禁つらまうり行
 蚊をころと中ふ蚊鳴る旅森うな

蚊柱や大鋸屑誘ふ夕部
 蚊をころと夢の浮橋かたれうり

其角
 鬼貫
 沾荷
 文草
 小春
 嵐紫
 一笑
 鈎雪
 昌碧
 宗因
 其角

蚊
の

旅赤して香る草の蚊をり我
蚊を火の森とこらせまゝなりあま
うかり火や蚊をけむ方に老知と
指らひ一荒れも出さるるの蚊をり
草の戸を念佛の中もかりぬ

去来 嵐雪 杏雨 其角 鈍子 三翁

蝸
牛

蝸牛角ありまけよ須磨明石
批把の筆をとり且牛角なき蝸牛
世ふはれて踏ふみるまゝかとはあり
まゝ露や角に目をめりまゝはあり
は牛角細く夏の昔よりなり那
我むし踏はふしなるかとはあり

芭蕉 其角 大元 嵐雪 水鷗 鬼貫

蝉

撞鐘も初くやうなり蝉のこゑ
蝉のこゑ武家の夕食ふまゝなり
ゆとりてよ筆捨松小石の声
さく蝉のその木あもまゝ居つらぬ
捕りうらやうなり世みのこゑ
せこ啼や麦をらりおとこゑ
啞蝉のこゑね梢もあはれなり
月しろふ夢えて飛つ降のこゑ
せみなくやまをみて眠る松の下
吹おろそ風もたつとや蝉は麦
蝉なくや布織窓の昏射分

芭蕉 釣雪 宗因 鬼貫 昌碧 嵐雪 杉風 正秀 可吟 如行 曉鳥

空

蝶

鹿の子

更衣

鬼灯のかりをさしけくや蝶のから
 空せきや石の鳥居を啼捨し
 蝶のかくははくくかきて衣より
 目の玉をさして物たり蝶のつら
 破垣やとこと康子のからし路
 もとろしき角ふたりきし康子か
 鹿の子や麻正出まき青鳥
 一ッ脱くうしうふおしぬるもか
 はくくさきし川を花の更衣
 春と夏とまき人ゆきふ衣の
 鹿を具もかりのやとろや更衣

其角 一井 旬空 卧高 曾良 柵雪 野坡 芭蕉 正式 鬼貫 宗因

音

あしのおく布子賣をしとるもか
 扇蓋の暖簾をさしとるもか
 あらもえとるくおらぬ罪源し
 帯ふるしりまきと娘か衣の
 更衣襦もをさしとるもか
 てらくくさかきおほくよ衣のへ
 雲水小打込とるやあはれもか
 とるも久をとるふ屏風越ねし
 あつん著とを致もようし衣
 身をかきし、将まをさしとるもか
 綿をぬく旅痛くせしとるもか
 とるもやあはれあはれ衣か

杜園 嵐外 一の有 傘下 野坡 秋之坊 琴風 亀翁 且水 九郎 尚

給

青簾

獨を野ふとてふれとありせう有
一日く花よこさしきありせう有
くくくと空一まきうり給う那
給着るや十里をゆるん朝うら
初りくと木目人えとく給う昭
日ふかけて思ひきめらむ由似合
かこつたの下ぬきから給う素
くあきらふ青まふかたうとられ
其の後よりうもあれし青すく
あの日此縮毒つるせしきとられ
さう川まふ千尋の糸や青簾

嵐雪 鬼貫 園友 独ト 此筋 紺水 素於 月下 吟松 希因

葵

生は

くや夏の入口涼し青とく
もを簾くうのた切らもうふか
兵竹のよりに葵のまうりの自
下くの下けかきしも葵はつり
松原山田舎すはつりや登休
園くのみをみんあやありま山
新めてちやははるはつりの車
午時を突盛みなるふあう有
平うのみ祭うりのあはひう
あつりまて鬼小さうりては

眺後 支考 携良 曉臺 定克 白雲 玉笑 新美 古庭

卯月

臯月

水母月

ちりひ物と未さくや四月の操うり
此ころの肌着身ふふ心介月うれ
白雲のくもや四自のまうの山
山城や介月くもりの雉子のこと
なましくふに日月をうむ五月この氣
かろく身を風のせむる九月共
六月や風みふくまふあおきとく
こる月やあつと流る年とまは
あま月や梢とくりの風ゆるま
みなる月や朝起しとる大書院
六月や鏡ふ照りはく夏をむ

芭蕉 尚白 煙外 錢芷 去来 凡兆 鬼貫 素堂 杉風 惟然 怒風

夏書

夏書

灌佛

各を佛とく月のとるの夏書なる
花はくみや先ゆく人を思のく
日次りつてかそる筆の夏書は
流るくと夏虫のふては命うき
灌佛や雛子合とる教珠の音
灌仏やまもとくけも二年紙
灌佛のそのころ借しあうまね
灌仏やとや入相乃大はとけ
灌佛やはし並つる井戸の玉根

重則 言水 蕪村 兀峯 芭蕉 之道 尚白 百里 曲翠

見堂

七堂より歩へ余はや見堂
脱捨と夏の住居や花見え
張つて軒をぬく夕やち見堂

麥林
涼城
分江

新茶

はのてらる秋をかへと新茶うね
起くのとら後夜宿の彩茶うね

考逸
舎羅

葉撰

栂の戸をうめあけしと葉撰
大敷はしうねかへと葉撰
挾楚のそり踏ありくとえりう

嵐竹
史邦
山店

風呂

夏風呂や清水寺とみかたれり
風呂の茶は夏目もらほ細工うね

宗因
重房

短夜

みらる夜やかめ五文字不明石得
みらる短夜二階へと上りきり
短夜次古次り冠者に各残りね
みらる夜や木賃もるさそととて
みらるよやまよこ白粉の香ハのそり
みらる短夜の声なま長し馬や
みらる短夜や百合咲くけと明あかり
みらるの夜やうね火よ兼るる里
みらる短夜あまし手角や旅の爰
みらる夜や小見世明る町とらつ直

宗因
末山
其魚
惟繁
一掌
千雀
清門
林法
且蒸
青霞
若村

麦種

小角豆

行駒の麦母なるはむやうりう系
はくみ合ふ子供のはけや麦をうけ
地あふやまうとろ不足も麦の秋
家のしほのまや穂小出く夕日乾
一掃とれや鳥羽田のごとくしき
麦らのや内外もたれ志賀の里
あけまよりの種とく麦一穂
ゆふ雨牛おようとする麦野う系
燕や日づけ母とろおまうけ垣
小角豆垣妹々垣根のあまふまり
とろれてるま中じまのなれまけ杖

芭蕉 游方 此系 大車 之造 重立 女宗 根 釣心 魚

かめ

鮎

かめを賣りいくなれ人を酔き人
二の富ハ廊へあちま初かめを
下部をふかめを食する日や佛
麦物もて鮎うて食ふ山家うあ
うをよめせめたあや下しせひ
漕はけと岸の在りかめをこり取
かうくひても先達船やこり門鯉
やあまはくく夕暮のかねは鯉治
鮎捕やなれなとりのく後あま
格上小鮎をひくくや毎の伝ゆ
とろまてもるふなうや鮎の鮎

芭蕉 沾洲 嵐雪 花紅 百里 紫紅 岩翁 宗因 宗因 妙高 負頼

蠅

昔柴を蚊をみはるや八瀬大赤
以てんや松よかやほふ昆陽池
らそく庭をさく入れり蠅の中
蚊の声おのれさきしとかやむと
老れ身のさくみよや蚊をのそは
花あやめの海りめかをる嵐う給
らゆまひやとや帟き紙幟
雲うとよまの穂入るて帟のそり
左右さふ横雲うとれれありら
茶じらの中ふまらるる風ゆあを

去去 鬼貫 車末 曲翠 岩翁 其魚 宗 文 百 芦

幟

粽

菖蒲湯

草草や豊の粽は國津風
上るるはけやや粽のそとれやう
あはやくは粽とくならりゆき中
下さるる初物そやー柏ちるれ
山笠のゆひめかうーやちりれ菴
物さーと粽を切やか乳六入り
簀のりちうはちま出るは粽う有
揚弓ふ鼻ああらひくちりれ哉

志やうふ入る湯火りひたり一盃
あはれよやうふの浴お蚊く述る

鬼貫 西吟 路通 蓬雨 卜く 玉芙 菴尺 甫盛 荷兮 来山

印地
らち

子小似くる子のかさうとや印地打
かてしらの嵐を印地かろらち好
年ふるま人のと好しや印地可

仙化
志
溪石

競

馬

競馬埒小入身のりまみかう那
人の世もかうくじりくく人る
競る拵まなう埒しらふさるなり
唐人よ一度えせうた競馬く好
けのそんく埒りの陣の斬うな

其角
山川
土芝
草士
朱袖

竹醉

日

雨雲や竹も酔日の人あつち
竹うらやまよりせざる茶碗酒

其角
野坡

五

月
雨

さみさみふかき雲のりや藤田の橋
五月多や蛭判のとほを編の衣
さめを雨多き埒のりとおえさるり
五月雨小流しや紀伊の八莊司
けろろれいたく武彦埒の秋徳
五月雨と埒やまき道一太の川
さみさみ何を茶小汲深の人
五月雨小柳まきつられけりう系
牛もかりしを羽のあうり此五月雨
海山まきみされそあや一トらふみ
かほぬら小田子のりこそや五月雨
め月多や柱目か出と市の家

芭蕉
嵐雪
鬼賈
去来
宗因
望一
鞭石
龍
九北
其角
松芳

入梅

虎々

五月雨の多や淀川大井川
頭をきけて馬もあせりや五月雨
はみくねは持めりるるをこころ

挑隣
荊口
里東

夕立のかりら入るはりりう年
宮崎も岩とて雲を入梅あうり
双六の相手はあはれはりのめさ
桐亀狩夜あを起まはりり我
松風や入梅ふりり日のあ曇り

本草
養浩
胡父
銭生
文丸

虎の袖をらあや降るは
降りの中ゆる死名や虎の雨

鬼音
一声

五月

夏の

夏月

五月に嵐あ難くらなる人の家
たたくし峯ふ下結るく五と雲
さ門も舟み挑り虫をもたうく

舟泉
探志
楸下

夏の日も難き餘のりやう那
なみの日やさく死くよみうは
る夏は日をまきとも海田のあのみ

嵐雪
文里
鬼貫

蜻蛉やとうねる夢をたらの月
明くのか家お伏見や夏の月
あらの夜や東へかり月を西
城下や笛きくともくあ川の月
たあれは酒もさるる夏は月

芭蕉
嵐雪
宗因
露白
挑隣

夏野

なみの山

火串

馬ほくし我と終ふる夏母を
 拈まき麦をくまふ夏野を
 掃らふとまきや夏野のまきりくを
 うつちの嵐をくまふ夏野を
 なみの山やうも井小はそる雲の影
 花をくまひけふ夏山の紫くあま
 なつうまを雲をえの社麻風う那
 雲雀啼くあま物とく夏山の
 うの母木の鬼をおそれそり
 照射ま念佛の上を焼くま
 蝦小斬やかつまをりやば

芭蕉 生林 史邦 支考 鬼号 宗因 牛角 松風 露宿

やまらち

田植

投らむとてりらき命や紫の點
 目通りののをろの履や紫さう
 牛あうは音もろろき田植う
 渺くくと尻尻あうろ田植う
 松なりふせりあうろ田植う
 音響るやせけんあうろ田植う
 疎くくと苗をのまめろ田植う
 露の露ふ小亀おさうろ田植う
 山吹も巴もあうろ田植う
 菅あまのりを脛よりを田植う
 白鳥の声小尾のあう田植う
 風流のをくやあまの田植う

此筋 其角 膏車 曲水 丈草 正秀 示蜂 立竺 詩六 管吟 鬼貫 芭蕉

早乙女

早乙女かへく取くる菜飯を
志はくも早乙女くふ清田の
早乙女の手てせくめのよ川は支
州の戸や早乙女ぬる其隣

嵐雪 景道 彫棠 百里

早苗

西う東うまの早苗あも風は音
菩薩とふうくくや及の梅り苗
燕の下腹さうはささくこの那
ゆわりのや楊よまきさる早苗多
ふとる牙の植おられくは早苗外
順れう棒入けり早苗うち
とらうくく雲ある谷の早苗うれ

芭蕉 乙別 胡布 冬市 魚白 琴風 紅尔

青田

田草

里の子う燕飾るささく人の有
親は日の寺へ助うは早苗うれ
谷風や青田を廻る菴の客
畔豆もさも小畑入青田うな
ぬれ髪あふうはよ門の青田うお
糸帯てあともさうらるる青田外
凍くまや八人代の田はあをみ
橋の小さ島の崎も青田うな
はまき橋や田草もさうねさう水
田のうまよおされくく富士詣

支考 臥草 其 丈草 楚舟 汀鶴 桃隣 荒雀 知足 山店 奚魚

扇子

扇

跨合ふ十二の骨のあかたの那
多とまひふ旅の跡のふらふら
さらはちまふ扇かうけてまう涼し
ひらきまて饅頭かきあき我
扇折子ふまふらうき化粧の
小振あけく肌のはあきた扇の
あめりくひらく王地まの
青丹より白たうらななる
らまのあふらちのあさの白八
かきよりの男かまはまはら
傍草ふらふらさし物か
一峰

守武 宗因 丈艸 草士 尚白 朱門 宗因 末山 其角 左志 一峰

紙帳

帷子

祇園會

夜よりや露人紙帳かははる
故よりくまのくまの紙帳か
おひふとと糸帳小うけと送り
かまの四五六月のまの
帷子あはるはりまの日出る那
うとゆや佐保と龍田の留は姫
祇園會の山路より入るや大徳
まのや山木はある祇園の會
祇園會や林のまのや手向
まのまのまのまのまの會

其々 負々 野々 宗鑑 丈草 青娥 宗因 梅盛 如負 山嵐

氷室

水の奥氷室より川ぬる柳の那
ちりほめて千年あねま氷室山
ありくくや家ふ冷水中れち
湖や暑ををしはくものみ松
雲の峯かんと嵐くくくも
又ら終や元くくくくは雲の嶺
くもの峯室ふくくのりやはたね
柴刈くくくくもくくくくく
雲の峯腰うけおくくくくく
雨乞ふ先をくくくくくく
あまをや近江となりし川の敷

芭蕉
負室
溪石
芭蕉
鬼貫
去来
桐西
川水
平水
乙一

雲の峰

雨乞

昼寐

土用

虫干

山人の昼寐をくくくくく
かきくくくく洗濯するの
まてくくく額あきゆる
白雲の天は原草土用く那
寒晒く土用の中かはく
捨人や木草にかまて土用干
ありかた時代く達や土用
らはりの香や虫干もせく
内張の鏡かあきや土用
虫けくやせめてくあね清え

批妓
昨非
竹柳
望一
許六
其角
杉風
卜く
理牲軒
肅山

暑

あつき日風海ふ入り取上川
 焼豆腐らとくてあつき夕日う船
 墓の二家あふうらねあつきう那
 とん庭の砂あつらねりうらう素
 ち終んこの藪ふく風そあつらり
 かんとうあつ暑りと石の壁とく
 照付てあつりもあつら海のらへ
 毒もありふもあつ宿のあつき我
 及らうふ蚕てと臭のあつはる
 元山はちうらあつらぬあつき水
 粉かなれ蝗もあつら暑いの素
 馬の目はあつらうあつら暑いの素

芭蕉 宗因 去来 荷兮 野童 鬼貫 嵐雪 氷花 許六 猿雖 里東 牧童

あつら砂中雀足あつらあつらう那
 田の草はあつらあつらあつらあつら
 蝉なつらあつらあつらあつらあつら
 年あつらあつらあつらあつらあつら
 並松をあつらあつらあつらあつら
 草の戸やあつらあつらあつらあつら
 名草の内あつらあつらあつらあつら
 積あつらあつらあつらあつらあつら
 半日ハ朝露あつらあつらあつらあつら
 空あつらあつらあつらあつらあつら
 村西の木城あつらあつらあつらあつら
 あつらあつらあつらあつらあつらあつら

蓬望 之道 探志 溪石 卧高 我峯 乙洲 卓袋 蓬船 行寄 其角 素堂

夕立

夕立の雲もかゝらむとるまの空
ゆふぐちのまきこや何處よ下詠をう
白雨や障子かけくぬれにゆきし
ゆふぐちのまきこひのく月や松の上
夕立らにゆきし外をうとんまうお
ゆふまゆ下傘ぬく徳の那
ふ雨の跡おり後や堺うら
夕立小追らまてくぬれやゆきし
ゆふぐちや鉢をまては源一守
ゆふぐちや坂行駕は川よふら
ふまゆ下傘ぬく徳の那
夕立の原おまぬとれ枯木うら

去来 鬼貫 嵐雪 夫州 其角 傘下 愚哉 隨友 仙化 山川 泊邊 荆回

簞

竹婦人

ゆふぐちのまきこひ降と静なる
白雨のまきこひはゆれつ山は上
夕立は跡をて廻る山田かな
ゆふぐちやまきこひ牛の門ち久
夕立や樽の臭のゆきまきり
江山や沼津の屏風をうゆきし
さゝなみや近江おりて残 簞
ゆふぐちのまきこひ枕敷なり竹婦人
抱簞や妻かへくまきのふらふ

去来 昌房 子祐 李下 以肩 宗因 其角 卯七 其角

涼

破風くらり日影のよろりれ夕涼
 涼しきふ榎もかたね木蔭るる
 とくくして涼しや宿の這入くら
 るは夜涼とまりにたつふ涼るる
 かけ涼し松糸さして路日和
 ちね人と謡同答にさみかる
 犬も逸な夜追ふ我のさみ我
 とくくこのかたのりや夜半の色
 翠簾うして維妻かたの涼と舟
 水と羽と合は行轉や夕さみ
 小屏風小山里さくし腹の上
 おもつものくふ達より夕さみ

芭蕉
 玄旨
 荷兮
 去未
 宗因
 鬼貫
 嵐雪
 貞室
 秋色
 沾徳
 丈草
 吹風

とくくさや櫓の下ゆくあのおと
 涼しは波のそれてめは川垣の船
 桃燈のともちらゆりさみさみ
 船涼し櫓のかりさしと沖へゆく
 管涼し櫓よりのそく茶の白ひ
 我舟と涼むまきまかり涼しきり
 洋や魂なるとと川さくさみ
 とくくさや帆は船既おちし雙
 琴ひいて老をかませよ夕さみ
 半ぬかた合夜そ朝露夕さみ
 とくくさやうらうらとゆきとあり
 涼しはやま川を渡り口の砂

俊似
 未學
 卜枝
 秋風
 巴山
 卜と
 柴帯
 甚角
 智月
 支考
 里東
 句空

薰

水

このあつり二三夜りしゆすくえ
ともとれお本城さくくや風の音
かきひらの脊中ふくあつ涼みり耶
ころりおくも尻吹くさるすくみお
故ををわく窓一度吹む戸に我
さくさくや物らあ声さ瓜の小玉
はく浪や風の薫りの相おあし
目ふ耳もああぬ風けかをりぬ
帆をかふる朝のはくおや風草る
うら水ふのこおさくみや梅乃中
あつ川やさくの垣穂ふ夏の月

野 山 衛 一 土 鉤 芭 鬼 甚 文 早
坡 川 門 笑 芳 壺 蕉 貫 角 車 袋

心太

瓜 来

沖繪

心を紙園とやふおら
血鏝ふ駒のけあけやさうてん
多門のうらあ呼せんとうてん
柳のうらけを涼とらんま来
児のまけ玉あもあるま来うさ
白くてもあき味やまら瓜
うらうらてま来もみえぬ暑哉
茶けらりけまを洗るま真来瓜
酔徒利瓜水さあやちを沖繪
沖繪ふれとりてりさくよ

宗 其 芭 嵐 鬼 去 正 儿 曉
因 角 蕉 雪 貫 未 秀 董 臺

中興

清

為

城めとや古井の清水まゝの向人
援とりのあり後清なるの片草鞋
まぬくひの手下もあうな志まゝのれ
六玉川高野の外に清なるなる
さみきりて塩干の沖に清水哉
帷子の深きまゝてゆく志まゝのれ
遠き山をぬくまゝの清なるなる
連あすこまゝとせと結ふ志まゝのれ
松風よ巻の行よは清水の角
我跡く缺層たちよる清なるなる
山麓や志まゝのれ清なるなる
好みとえてまゝの清なるなる

芭蕉 嵐雪 宗因 去来 俊似 尚白 一文 瀾道 許六 卯七 嵐水

西井

汗拭

旅人の足あととよめる清なるなる
あゝあゝの跡々清なるなる
此夏の縁はトゆゑ清なるなる
清合はくまゝ形くまゝ清なるなる
はしし井や底くら寒い人の声
きりりしめや涼世はかゝる水まゝ
さらり井や男あゝまゝの清なるなる
尋常の和巾たゝまゝ汗拭ひ
扇折いゝま持とれあせぬらひ
生の松ゆゑに志まゝの清なるなる

仙化 其角 沼村 蕪村 桐西 嵐雪 汗々 嵐雪 千那 其角

夏 瘦

夏やせふ能因あつも小食あり
かりの瘦と悉とる人とるく道とや
多門やせやと及唐士の半妃うら

其角 風子 友醉

川 狩

川狩やまのらうし流し手柄とる
川より手をとるし木蔭おま涼と

我峯 愚心

秋 近

秋のよきま月小秋近一故とん
飛かへはとえはのまも秋ちし

此筋 京市

不 二 詣

あつ雪おまきま流し富士詣
角帽ふ雪お周むやあし詣
武士と川 越とあふ富士まうて

其角 素堂 雪梨

ほ 被

人並の端をも越ちり街被川
夏よりらひ目の行方や流路島
彼は扇一度お流と御被う南
吹降の合羽よそまうくを流川
らふ女まじ豆腐とりのまう被川

宗因 嵐雪 未学 其角 琴風

弁 宗 法

印の花も及摺寄しそ川被山
うはら形よとまうと流起水
弁のそらも隣あう手やわれ嵐
印は花や雨のあうは流の跳
うのそらうおのりさうは曇うれ
弁は花のあう持かたうは流の垣
うのそらうは流のあうは流の垣

去来 杖風 之道 楚舟 支考 土芳 野坡

若葉

しつと雨小待くくね格極の若葉我
也一客にし若葉の平太はあきあけ
ひとしきれ嬉もうるはくつうをか那
うしあしとわいて思ふよ死ともあふら
おりのひこめてみるきむのあふあ
若葉あふく風やあふと時刻よ
非情あも毛泳き枇杷のあふあ
まうこころを我が身延のあふをこん人
きのり株のあふあをこんれは様このあ
若葉あふうらさくお詠あのを冬木う那
夕まふうらあふのう人の若葉うね

素堂 其角 楚舟 定良 宗因 嵐雪 鬼貫 敬西 不交 藤蔀 荊

若楓

僧心の青ねおと人やこころかへく
物食のあふあをこんれは様このあ
馬ゆああうは打くやあかかくて
さうりけなれ針事うさうわう楓

良用 嵐竹 卓袋 鬼筍

若櫻

葉はうらにわ由うーや鞆のあみ
あふととうり散のこころても様う那
えさうさうや泣け春あのをさう死

鬼貫 沾荷 蝶羽

若梅

さうらうは寒冷あて暖い八芳の山
山梅 實見あうてさうかとさうも那う

一鉄 影棠

茂

嵐山藪の茂りや風ぬさち
川苔のふまさる白み茂りかた
神くんと春日あけきてはくらぬ
ちけりゆく草津の蛇や雉の啼
光こもあつ山の山おろきり
花のあと今朝の雉ふとの茂り我
よ川よのい椎の木もあり夏木
にそだの本社らしらるる木を
鷺の羽は浅黄小吹くや夏木を
夏木とちとち木はくま猿の声
蜘蛛の巣はあつきりのあつり夏木

芭蕉 嵐雪 鬼貫 宗因 去来 子珊 世蕉 昌維 希因 安枝 鬼貫

夏木

下園

青嵐

常盤木

須磨寺小石類ね笛きく木下園
芳雨小木の下園社氏中帳の糸
下園や牛乳御前を腰へら
うき雲や左右小別きて青嵐
麻路巾吹落しきりまあじ
色としもあつりあつあを嵐
雨をねて松の白ひや青嵐
梢めを破風の光りやあを嵐
松風の落葉あつ水の音とらじ
夏子ら小嵐あめつるも常盤木

芭蕉 嵐雪 百里 史郎 巴源 支流 百里 芭蕉 負室

桐の花

かみまりののちふて曇りし桐の花
桐の花青きしらえせてをのひねり
堀こしふ大工はつひやまりの花
此うちり降る南やまりの花を
茂る木の中ふかりぬし桐の花

史邦
猿雖
因友
子兼
トシ

花袖

袖の花は昔ちのち料理の写
ゆはちや度へりるついであり
行・あもこのほへ花袖をみるひと
袖つよよ仇名あこ酔わうし

芭蕉
彫棠
言水
佑徳

夏栞

蓋しこれ蚊の飛井戸や夏栞
脱ふめて風は夏あかりるる栞

一嵐
涼体

寺梅

寺梅や木のれう空ふ花はま
まのちや乳母うま妻のあかく
あを梅やそまよりりりし梅後

岩泉
幽光
入松

櫻

櫻佩てつさくとめうしやあけ者
干物のししう初らむやるる櫻
うきまやあちのむよ素の声
温飽打とるりあちりああら哉
水まことのうもつ櫻のそちよのほ

嵐雪
白雪
因友
素覧
平吉

戸木花

世のくはこつしねらねや朝の粟
湖はなまはらちるや粟はらな

芭蕉
角彈

合歡

泉深や雨は西越々梅ふのちね
合歡の本は梅よりそねる心清き哉

芭蕉
仙花

覆盆子

枝接や付ふる一とらひいちと
手の跡と忘れず甲斐のいちと
鼻紙の覆盆子も跡るをそ祿哉
水うれば遊とりのまぐいちと
井の底は蛇と忘るへ蔓のいちと

重則
陣由
朱由
杜池
山川

古きや

古きや傍まぬれくと接樹のを
掃とめくさい日ねくまぬれね

三園
度江

柿

此中の古木のつれかきのと那
榎は花蟻のちくくそくはく

此
可廻

百日紅

さねうとも花ふはぬ百日紅
ありともや百日紅の散る日まそ

其角
支考

燕子

花

杜若もよみ花白けおひあり
そねはつと蛇のゆくやかきうり
かよはぬ花もよみ花をくよ杜若
獨りあり花はくせんかきうり
植りりりりりりりりりりりり
吾をる杜下もかくねりりりりり

芭蕉
去草
嵐堂
周也
桃西
成之

牡丹

寒うらぬ香や牡丹のちねの蜜
 土嘗くくふおむほむ牡丹うな
 我々身の細うなりふやほいふ如
 笑あがりあるんまきれ紅牡丹
 蠟獨もあつさりかへほやえうお
 一先のほらん端りくはまう素
 牡丹ふふうらとりとよれ唐茶哉
 頭判の袖こせうきあともんうる
 爲る起川牡丹のほをみひくくま
 淮宿を穴明きまふ紅あらん

芭蕉
 嵐雪
 鬼貫
 一井
 許六
 踏健
 挑隣
 猿雖
 瀟波
 毛紈

芍薬

葵

苕花

芍薬も花とりの紅とあられり
 寸陰もどしむ芍薬の花えう非
 麦の穂は芍薬埋ひ里のせと
 刺さけの葵ををまむ鳥憎子うぬ
 野草あふ土のとらうく葵この有
 おも瘦てあふひつけうる髪うに
 螢えー一兩は夕紅やあめあひ
 蛭け卵うまきくおんはく苕花のち
 うらせく跡て咲きうらあけの若

紫紅
 有也
 自笑
 魯丁
 岩泉
 荷兮
 仙化
 野坡
 希因

芥子

白芥子や耐雨の花は咲けり人
 給出せむさ人けりのひとをある
 秘奈の一下濱道守を芥子の花
 芥子散く直ふ実をえる夕う那
 ちるさひ井思を拾ひぬけりの花
 人のさと散くささておぬ芥子けり
 咲りちるささるまほまほまほの白田我
 まさちるさ馬蹴りささるささの芥子
 大粒を雨ふささるささのささ那
 しく同との世ふまわりのささのさ
 京出さく海りよささ芥子けり那
 青くささ白ひもあじけり乃花

芭蕉
 未山
 去来
 李桃
 吉次
 洋水
 傘下
 大草
 東
 支考
 里東
 嵐

あきみ

竹の子

前の子や船裾まきささり旅とる
 なさけささき名状しひもせさる前
 竹の子や雪隠ふすて嘆哉の坊
 筆やかり藤の床けささるささり
 ぬささの竹の子うれ竹生時
 子おはれてるささるささる去年の竹
 垣根こし竹の子取入概この那
 竹の子や境目もあさると二歳生
 ささの子おちるささるささるささ
 筍のちうらけささりあさりか南
 下りささ竹の子盗むささよりうれ

嵐雪
 風
 嵐雪
 鬼貫
 去来
 去来
 大草
 全峰
 智丹
 九兆
 猿
 玄梅

落

りつりつして落の葉あふりのおふくとも
草外やふきの葉あふりの落又のちと
子小あまうとりの迹込ふきさ終り

里東
波村
乙州

茄子

昔の生うこ青あふうくやあふこ汁
赤味あふあうねまきりな初茄子
一本の茄子もあまはあふあひうわ
神あふあふあひうわあひうわ

芭蕉
北枝
杏西
園友

藜

えとりのせん藜の杖ふらり日まき
元政の軒かろくはあふうこの有

芭蕉
西雀

紅の巻

紅の巻も海のかさりの朝懸あふ
きくあうねまきれらうりあふあふの花

去来
山本

夏

葉

蠅あうら一枝あふんかうのまき
夏葉やあふあひの花あふあへ咲く
あうりあふ法障のあふあふあふの葉
かうまきくやうねもあふあふあふあふ

其角
拙候
をんあ
旭芳

撫子

あふあふあふあふあふあふあふあふ
撫子あふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふ

越人
嵐蘭
猿蹄

百合

橋

花をゆれどかゝ浮世をくぐるま百合
姫ゆりやうくよりたりの橋のゆき
餘りのの箱ふまのり百合のこぼ
さみうれふかおもたしかりれをさ
草ゆりや百合と中しく花の教
後河路やうり橋も茶の白ひ
あそはる橋てとらと花の起こりそ
たちを好やあそひの極ことへえくは
橋やまらふふあたらふあそひの糞
あひあひのと橋くらう一旅とくこ

宗因 素新 嵐雪 破釜 半残 芭蕉 鬼貫 木因 桃隣 我峯

昼顔

藻の盆

ひるのちみ米橋流むあつまるり
豆敷ふひとあまきよよ一落書の跡
初る白や夏山伏の峯 後くは
夏うほやさもに川くはくまをさけ
枯柴と昼うほ暑く一疋のすまめ
ひるのほやりの暑れとあははくり
昼うちく風のこころやあそひのゆと

藻のそねをかんまする蜜の壺夏丸
盆藻てる湖水あらきまや夜の山
瀬引くく藻のそねあむ暑く那
藻はそねのとまきれくや泡の上

芭蕉 野坡 交考 桃隣 斜嶺 沽圃 嵐南 胡及 秋風 児竹 桃隣

櫻
麻

後ぬきうて中やうくらんたんと麻
行ぬけの家やうとじや様由は
三日月はいつうおて居るはらう麻
いりあしてはらふうううん様由は
誰ふけは自問うううんさうう麻

音亞
一矣
嵐竹
杜格
普人

紫
湯室

紫陽花やかたひら時の花は
あちさるゑと五器よりうそや州柳
紫湯室やうの目久しうの馬ひとら
あちさるゑあちさるゑ安き一扉う南
常くくえよ名もあちさるゑのむは
紫湯室や酒のち好くう空のえ

芭蕉
嵐雪
極扇
伯之
為
希

萱
艸

甘みてまて人のまふまへうとれ艸
任ハ誰と家よ名まうとら草

未山
燈外

あ
兒や

あしとまうと情や五天のあやあさ
あしとらり時もあやえあまふけり
あしとらり尾の長をくふあやあさ
葉の耐る根をうれう草蒲らさ
あやあさと軒上人を何のほりて我
五日うてあしとらりあやあさ
馬あまある侍まはしとらあやあ
何あれのあやあさのあまあさ

芭蕉
嵐雪
如泉
荷兮
樵隣
仙化
子珊

蓮

さうくと蓮さうくとらけの亀
浦舟の頭さうとらけさうとらけ
痛てうとら蓮の透る朝海さけ
ゆく起やゆくさうとら蓮さうとら
蓮のさうとらや八島のとられは
客あうとら蓮の地追りん
さうとの香や田の仕角さうとら水跡
蓮さうとら八月代さうとらあうとも
鮪のさうとら蓮さうとらあうとも
吹散りてさうとらさうとらあうとも
笠さうとらてみなうとら蓮さうとらあうとも

鬼貫 夫草 其角 玄梅 史邦 良品 泊徳 晨風 自悦 正秀 古梵

蓮葉

浮葉さうとら蓮葉さうとら風情さうとら
さうとらのさうとらあうともさうとら

素堂 白雪

沢原

沢原のあうともさうとらあうとも
あうともさうとらあうともさうとら
あうともさうとらあうともさうとら

嵐雪 鬼貫 朝叟

菖蒲の花

あうともさうとらあうともさうとら
菖蒲の花さうとらあうともさうとら

此筋 鈍可

菖蒲刈

鴨の子や代あうともさうとらあうとも
さうとのさうとらあうともさうとらあうとも

邑姿 且菜

名
林

林
檜

香林の肖しるすてうろのえん
昼鐘や若竹そよぐ山はとと
下えくふさけりまき林のあまふく
若竹や西追ふ風はそとむく
つる竹や水の中てのそよぎ合
つる竹の香ふあうくした鱸く系
香林のうらふゆみさく雀う那
つるくけや涼しき声や七ッ
くふとほもアんとおゆふし
ゆうしきも紅のあまき林檎う那

宗因
尖草
仙死
踏徑
和泉
百里
龜洞
車来
其角
百里

